

いいかが
放題

若者たちよ、 もつと、世間と交わろう。

学生運動のさなかに入学

私は、一本釣り漁師の三男坊として生まれました。二人の兄が中学を卒業後、県外へ出ていたことや、家があまり裕福でなかったこともあり、自分自身はいつでも親の手伝いができる地元に残ろうと決め、長崎大学を受験しました。

私は経済学部出身ですが、高校生の頃は、理系をめざしていました。将来は技術を身に付け、何かしらのものづくりに携わりたいと思っていました。しかし、「どうも、お前はそっかしく、慌てん坊なところがある」と周囲に言われ、そういう性格では緻密さ、正確さが求められるものづくりに向いていないと自分でも考え直しました。それで、将来の職業の選択肢が広い経済学部に進路を変更したのです。

私が受験した年は、東京大学の安田講堂事件があった年です。学生運動が盛んな時代で、長崎大学もその影響を受け、入学時期が遅れました。ようや

く、大学に行けるようになって、学生会館などがまだ封鎖されたままです。大学に入って最初にやったことというのが、「学館封鎖の解放闘争」でした。私たちは学生運動を通して、仲間や対立する相手など、とにかくいろいろな人たちと、ああでもない、こうでもないという議論をしました。熱く、真剣だったので、いま振り返ると、貴重な体験をしたと思っています。

アルバイトに明け暮れた日々

大学時代は学費や生活費を稼ぐため、アルバイトばかりしていました。漁師である父の背中を見て育ちましたから、身体を動かさないと飯は食えないという思いが強く、家庭教師を2〜3人掛け持ちし、お米の配達や造船所関係の特殊防水工事など、さまざまな仕事をしました。そうした経験は、私の血や肉になつていまに活かされていると思つて

います。ただ、あまり大学の勉強をしなかったことは、大いに反省しています。

また、いまは、たいへんな就職難ですが、私たちの頃は、売り手市場。学生1人が、たぶん5、6社くらいの内定をもたらっていたと思います。私は、経済学部の方先輩方が活躍していた商社マンへの憧れがありました。地元で役に立ちたいという思いもあって、長崎県庁へ入庁。以来、ずっと行政畑を歩いてきました。

迷ったときに必要なもの

社会へ出て仕事を始めると、これまで勉強してきたことや経験だけでは、どうにも判断できず、迷ってしまうことが山ほど出てきます。そういうときは、頭だけではなく、全身全霊で判断しなければなりません。それは、まさに、人としての総合力が問われる場面です。では、総合力を身に付けるためには、どうしたら良いのか。それには、さまざまな人の言葉に耳を傾け、その考え方を知り、自分の中に取り入れていく。そういう姿勢が大事ではないかと感じています。

若者に対して思うこと

県庁に入ってくる新採用の職員たちを見てみると、皆さん、よく学ばれているし、性格もいいのですが、どうも身ご

しが固くて、ごちない気がしています。

小さい頃から机の前に座って勉強をしてきた上に、この氷河期の就職戦線のなか、合格するためのノウハウを教え込まれ、結果、皆、同じような受け答えをしている。それは作られた魅力で、個性がなくなってきたのかなと感じています。

作られた魅力は、すぐはがれるし、必要ないものです。もっと、世間や社会と交わる機会を積極的に設け、しなやかさやしたたかさを学び、野武士みたいな人になって欲しいなあと思っています。いろいろな生活体験や回り道をして、自分の身をもって獲得したものが、社会を生きていく上で本当の武器になっていくのです。

やろうと思えば必ずできる

やりたいことは、心に強く思い、途中で投げ出さないことです。県職員時代、用地買収や道路建設などで難しい問題を抱えた案件を乗り越えてきました。その経験から、何ごともあきらめず誠意を持って対応すれば、必ず道は開けると実感しています。

大事なのは、行動を起こすことです。簡単なことも、放っておくと懸案になります。壁にぶち当たっても、信念を持って、具体的に取り組んでください。いつの日か、必ずや実現できます。



長崎県知事

中村 法道

Nakamura Houdou

1950年長崎県有家町(現・南島原市)生まれ。1973年長崎大学経済学部卒業後、長崎県庁へ入庁。対馬支庁長、農林部長、総務部長、副知事として活躍。2010年3月より現職。趣味はイカ釣り、家庭菜園。